The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国詩話の日本詩話に対する影響関係の再検討
Author(s)	祁, 暁明
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45769
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	祁（キ）　暁明（ギョウメイ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　18955　号
学位授与年月日	平成16年6月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**中国詩話の日本詩話に対する影響関係の再検討**
論文審査委員	（主査） 教　授　深澤　一幸 （副査） 教　授　金崎　春幸　　助教授　小門　典夫

論文内容の要旨

鎌倉時代の『済北詩話』に始まり、明治時代に至るまで、おびただしい数の詩話書が出版されている。本論文はそのうち、虎関師錬の『済北詩話』、江村北海の『日本詩史』および山本北山の『作詩志彀』を中心に取り上げて論じ、従来の研究を再検討し、中国詩話から受けた影響についての見直しを目的としたものである。より具体的には、虎関師錬の『済北詩話』と欧陽修の『六一詩話』との比較、江村北海の『日本詩史』と胡応麟の『詩藪』との比較および山本北山の『作詩志彀』と袁中郎の「性霊説」との比較を中心として、中国詩話が日本詩話に与えた影響についての先行研究の説を再検討することを目的とする。

序論

序論では、主に江戸時代に大量に出版された日本の詩話書の性質、成立背景や表現形式、思想内容、詩話の作者および詩話編集の動機などを検討し、その一般的な特徴を指摘する。

本論

1．『六一詩話』の『済北詩話』に対する影響

1.1　『済北詩話』に対する『六一詩話』の影響について、先行研究は、「『済北詩話』は『六一詩話』を模倣したものである」と主張している。その根拠は、①両者の説話の数はともに 29 で一致している。②『六一詩話』を模倣した『白雲小説』や『司馬温公詩話』などの説話の数もすべて 29 である。よって『済北詩話』は『六一詩話』の模倣であるという二点である。

本研究（第一章第一節）では、この二点について再検討を加え、両詩話の内容や表現形式について考察した。

私見では、日本最初の詩話、虎関師錬の『済北詩話』は、もともと独立性が強く、詩話の数においても、内容や表現形式においても、『六一詩話』を模倣した痕跡は見当たらない。その理由は、①説話の数について、両詩話にはともに複数の説があるので、必ずしも 29 の数で一致するとは言えない。②『六一詩話』の模倣と思われる『白雲小説』や『司馬温公詩話』などの数も、必ずしも 29 ではない。③詩話の内容において、『六一詩話』からの引用がほとんどない。④表現形式や記載の方法において、『済北詩話』は『六一詩話』との共通点がない。

1.2　本研究（第一章第二節）では、虎関師錬と欧陽修の詩観の比較考察を通して、『済北詩話』に対する『六一詩

話』の影響を検討した。

私見では、虎関師錬の『済北詩話』は、独立性が強く、詩的主張を見ても、『済北詩話』が『六一詩話』の模倣であるとは言い難い。その理由は、①両詩話の著者が持つ詩的主張は一致しない。のみならず、両詩話の主張はあるところ（例えば宋人の「朴古平淡」論）では対立している。したがって、両詩話の模倣関係が成立する根拠は見当たらない。②中国漢籍に対して、虎関師錬は常に批判精神を持って独自の考えを強く主張しており、『済北詩話』でも欧陽修の詩論・詩評に異を唱えており、『六一詩話』の詩論を受け入れたとは考えにくい。③宋儒の仏教排斥に対する否定的態度は、虎関師錬の詩論の批評基準となっていることから、虎関師錬が仏教排斥をも主張する欧陽修の詩論を受け入れたとは思われない。

1.3　本研究（第一章第三節）では、中国詩人論をめぐる『済北詩話』と『六一詩話』との相違を考察した上で、『済北詩話』に対する『六一詩話』の影響を検討した。

つまり、話題を同じくする中国の詩人と、その作品に対する評論の異同から、『済北詩話』と『六一詩話』との関係を考察したのである。私見では、杜甫や陶淵明をめぐる両詩話の相違を考慮に入れれば、両詩話の関係は強くはないと推察できる。

２．『詩藪』の『日本詩史』に対する影響

2.1　『日本詩史』に対する『詩藪』の影響について、先行研究では、『日本詩史』の「徂徠論」は『詩藪』の「気運」の語による歴史記述に触発されたものである、とされている。また、両詩話の表現形式について、文学史としての史観、体裁をはじめとして、『日本詩史』が『詩藪』に負うものは大きい、と論じているが、この見解には問題がある。

本研究（第二章第一節）では、「気運」の語や両詩話の体裁をめぐって再検討した。

私見では、『詩藪』が『日本詩史』に与えた影響は、それほど強くはなかったと思われる。その理由は、①江村北海の『日本詩史』と胡応麟の『詩藪』は、確かに両者とも「気運」の語を使っている。しかし、「気運説」は胡応麟の独創ではなく、『詩藪』よりかなり前の宋末の詩論にも同じような「気運説」が説かれている。『日本詩史』の成立より約 10 年前に刊行された『丹丘詩話』の「序」にも、「気運」の語が見られる。さらに、両詩話には「気運」の語が異なる語意で使われている。したがって『日本詩史』に影響を与えたのは『詩藪』のほかにないという説は成立し得ない。②『日本詩史』と『詩藪』は、両者ともに詩の歴史を体系的に記述したものではあるが、両詩話の編集方針、史料の範囲や体裁の選択、資料の取捨などを考察した結果、『詩藪』が『日本詩史』に影響を与えたとは言い難い。

2.2　本研究（第二章第二節）では、両詩話の詩的主張の検証を通して、『日本詩史』に対する『詩藪』の影響を再検討した。

先行研究では、「気運」により詩文の歴史的変遷の必然性を論じ、その具体相を詳述するのが胡応麟の『詩藪』の特色であったと指摘し、また、この「気運説」は王世貞の古文辞派の復古論と違って、袁宏道の性霊派の反復古論に通じるものであり、『日本詩史』の「気運説」と同じものである、と主張している。しかし、両詩話の詩的主張を検証すると、『詩藪』が『日本詩史』に与えた影響は、それほど強くはなかったと思う。

その理由は、①胡応麟の『詩藪』の詩観は、王世貞の復古派の詩論と変わらず、袁宏道の反復古論に通じるものではない。②江村北海の『日本詩史』は、胡応麟の『詩藪』のような「気運説」の上に立てられた復古論を取り入れておらず、反復古論の態度をとっている。

３．袁中郎の詩論の『作詩志彀』に対する影響

先行研究では、山本北山の『作詩志彀』に対する袁宏道の『袁中郎全集』の影響について、およそ次の二つの対立的な見方がある。①影響は間接的である、②影響は直接的である、という二説である。

本研究では、山本北山の『作詩志彀』に対する袁中郎の詩論の影響を再検討した。

私見では、影響は間接的であるという説に賛成する。その理由は、①『作詩志彀』では、袁中郎の詩論の引用が『袁中郎全集』の原文と合わない部分が多く、銭謙益の『列朝詩集』に拠った可能性が高い。しかも『作詩志彀』では、

『列朝詩集』からそのまま抄出した文は、『袁中郎全集』の引用より遥かに多い。②袁中郎の詩的主張に対する山本北山の発言には、自己流に片寄った理解や誤読も認められる。とりわけ、袁中郎詩論の中核である「新奇」「平淡」の論と詩風変遷論を踏まえていない。一方、袁中郎詩論に見えない銭謙益流の李王批判や『滄浪詩話』と『詩藪』の排斥論などを積極的に取り入れている。

また、本研究は、山本北山の中国詩人論を取り上げ、彼の誤読した箇所を示した。

私見では、山本北山の杜甫の「戯為六絶句」の理解は、『列朝詩集』の影響であり、誤読である。また、山本北山が重視した蘇東坡・陸遊・范成大・楊万里などの詩や詩の主張を見ても、彼らの共通性が「清新」の詩風にあるとは言い難い。こうした宋詩鼓吹も、銭謙益の『列朝詩集』からの影響であると考えられる。

4．中国詩話と日本詩話との相違点

本研究の第一章から第三章までの考察を通して既に明らかな通り、『済北詩話』、『日本詩史』、『作詩志彀』などは日本詩話の独特の詩観が示されているが、第四章では、第三章までで触れることのできなかったほかの詩話について、中国詩話との相違点を確認する。

4.1　中国の詩論と日本の詩論の相違点について、先行研究では、江戸漢詩の思潮は中国の詩風・詩論に追従するばかりで、詩話の著者に独自の詩的主張があったわけではなく、中国の文学思潮の変化につれて変わって行ったと結論している。

本研究（第四章第一節）では、中国の文学思潮、例えば、朱子学の道徳主義的な詩文観、詩画に関する芸術観、また、明・清の代表的詩論である「格調説」（明の李攀龍・王世貞の詩論）、「性霊説」（明の袁宏道・清の袁枚の詩論）、「神韻説」（清の王士禎の詩論）が日本に入って以後、日本詩話の著者が持った独自の考えを示した。

私見では、日本詩話の「吟風弄月論」や皆川淇園、塚田大峰の詩画論などは、いずれも独自の考えを持っていた例証であり、中国の詩風・詩論の追従ではない。また、太宰春台・菊池五山・津阪東陽・中井竹山の詩的主張を見ると、彼らが「格調説」、「性霊鋭」、「神韻説」を摂取した際、かなり独自の考えを持っていたということがわかる。単に中国の文学思潮に追従したわけではない。

4.2　中国の文学論と日本の文学論の相違点について

本研究（第四章第二節）では、中国文学（詩人論・作品論）に関する日本詩話の著者たちの独自の考え、例えば、塚田大峰の杜甫論、祇園南海の杜甫・蘇東坡論などを再検討し、日本詩話には、同一作家、同一作品に対する中国詩話の評価に必ずしも追従せず、作者独自の考えを示す議論が、数多く存在しているということを示した。

結論

以上のように、本研究では、日本最初の詩話である虎関師錬の『済北詩話』に対する欧陽修の『六一詩話』の影響、江村北海の『日本詩史』に対する明の胡応麟の『詩藪』の影響、そして、山本北山の『作詩志彀』に対する袁中郎の「性霊説」の影響に関する先行研究の諸説を再検討したが、結果的には、それらの影響は先行研究が指摘するほど大きなものではないと考えられる。

また、先行研究では、江戸時代の漢詩の思潮は中国の詩風・詩論に追従し、詩話の著者には独自の詩的主張がなく、中国の文学思潮の変化につれて変わって行くに過ぎない、と結論している。しかし、本研究が挙げる日本詩話を見れば明らかなように、それらはいずれもが自らの考えを示しており、中国の詩風・詩論に追従せず、むしろ、それと異なる意見を述べている。

したがって、本研究の再検討によって明らかになったことは、次の四点に要約できよう。

①詩話の類型的な特徴から見れば、中国詩話の主流が以上の日本詩話に与えた影響は弱い。②詩話の受容の仕方から見れば、中国詩話の重要理論が以上の日本詩話に与えた影響は弱い。③中国詩話からの影響の複合性が見受けられる。④日本独自の文学観・自然観は、以上の日本詩話にも反映されている。

これが結論である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国で成立した詩に対する文学批評「詩話」の日本「詩話」への影響関係を考察しているが、まず序論では日本において鎌倉時代から明治時代までおびただしく出版されてきた詩話書の成立・内容・作者などを、日本の文学研究を十分に利用して概観したのち、第一章では鎌倉時代の虎関師錬の「済北詩話」と宋の欧陽修の「六一詩話」、第二章では江戸時代の江村北海の「日本詩史」と明の胡応麟の「詩藪」、第三章では江戸時代の山本北山の「作詩志彀」と明の袁中郎の詩論「性霊説」を比較しつつ、先行研究の諸説を再検討している。

これまでの日本詩話に関する先行研究は概説的なものがほとんどであり、本格的な研究は乏しかった。本論文は、中国古典文学の研究を背景に、日本詩話研究の分野ではじめて本格的かつ精密な議論を展開したものであり、今後の研究の基礎となることは間違いない。

本論文では、中国詩話の主流が日本詩話に与えた影響は弱いという説得力ある結論を導き出しているが、その過程でまず蔡振楚（2001）の「中国詩話史」を参考にして中国詩話を「逸話型」と「詩論型」の２類型に分け、この２類型を参照系として日本詩話を検討し、いずれにも当てはまらないという結果を得たことは、著者の研究方法の新しさを示すものであろう。

また、先行研究が日中詩話の間に「一対一」の対応関係をたてて影響を論じているのに対し、著者が当然ともいえるが、１つの日本詩話には複数の中国詩話が影響を与えているという、中国詩話からの影響の複合性を指摘している点も、その研究の着実さから出た結果である。

ただし、「影響」という語をかなり幅広い意味で用いているために、影響の強弱を判断する基準が時として曖昧になる点が惜しまれるが、それも全体の価値を損なうものではない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値あるものと認められる。